日新聞　第3種郵便物認可　2014. 1. 4.

変わるまなびや　教育2014　3

白幡小の教員研修。どのような授業で、子どもたちにどのような力がついたかを分析した＝横浜市神奈川区

思考力　ヒント次第で∞

黒煙を上げて燃える炎。それを見つめる群衆――。横浜市立白幡小の6年3組の児童は昨年、平安末期の国宝「伴大納言絵巻」を見て、解説文を書く授業に取り組んだ。

教科書では、アニメ映画監督、高畑勲さんの「『鳥獣戯画』を読む」という解説文を学んだ。今度は、自分たちで、絵巻の魅力を伝える解説文を書いてみようというものだ。

解説文は、絵の説明だけでなく、自分の考えを書く必要がある。その考えを引き出すため、担任の渡辺誠教諭(39)はワークシートを用意して子どもたちに配った。シートに沿って、絵の着眼点、自分の考え、評価などを書き込んでいくと、解説文の下書きができる。「すばらしい」「引き寄せられる」など、評価の言葉も例示した。

「よく教師は『ぼーっとしないで考えなさい』とか言う。違うんです。子どもは考え方がわからない。そこを教えることで、思考が広がる」と渡辺教諭。書き込む手が止まっている子どもがいれば、「比べてごらん」「関連する所を矢印で結んでごらん」と考える手立てを教える。6年生の石井あゆみさん(12)は「先生に言われるだけだと忘れちゃうけれど、グループで話し合ったり、ワークシートに書いたりするので、授業でやったことを覚えているようになりました」。

すべての授業で、児童が司会進行する白幡小。話し合いや、発表の力はついても「肝心のまとめの所があいまいになってしまう」という悩みがあった。子どもたちが授業で何を考え、どんな力を身につけたのか。ワークシートには思考力とともに、授業を一定のまとめに導く狙いもある。

ただ、シートは発展途上だ。「伴大納言絵巻」の解説文の授業で、子どもたちは「絵の全体や細部を見て、気付いたことをたくさん話し合うことができ、絵の魅力がよくわかりました」とまとめた。

「これでは解説文ではなく、図工の鑑賞と同じ」と渡辺教諭は物足りない。シートは子どもたちが「事実」と「考え」を分けて書くことを想定して作ったが、子どもたちには伝わらなかった。シート自体が、子どもたちの自発的な学習の妨げになってしまうのではないかという葛藤もある。

昨年、白幡小では6年間で身につける力を系統立てまとめた「カリキュラムポスター」を作った。学校が蓄積した司会などの「型」と、それぞれの教師が授業で使った「ワークシート」を集め、学年別、内容別にまとめたものだ。これをもとに、学校全体で試行錯誤を続ける。「変化をいとわない」が合言葉だ。

永池啓子校長(57)には一つのイメージがある。

国籍も言葉も違う人々が集まって、世界の難しい課題の解決に向けて話し合うことが日常的になる日が来る。「そんな時、『じゃあ、私が』と先頭に立って議論をまとめ、アイデアを出し、報告書を作る。そんなことができる子どもたちにしたい」

（星井麻紀）